

GSI キャラバン：市民的公共圏と多様化する歴史認識－ヨーロッパとアジアにおける記憶と和解

研究代表者：大学院総合文化研究科・地域文化研究専攻・教授・石田勇治

2020 年度報告書 2021 年 3 月 25 日提出

2020 年度は、研究会 2 回と国際ワークショップ 1 回を含む研究活動すべてをオンラインで実施した。5 月 29 日に開催された第 1 回研究会では、本プロジェクトのテーマである「市民的公共圏と多様化する歴史認識」について議論するための土台を共有する作業を行った。本プロジェクトの基本的概念（「和解」「歴史・記憶・想起」「市民と市民社会」「市民的公共圏」「パブリック・ヒストリー」等）について、ヨーロッパとアジアをフィールドとする研究メンバーのあいだですり合わせを行い、相互に研究状況や関心の所在を確認できた。10 月 16 日に開催された第 2 回研究会では、本プロジェクトの関心を個々のメンバーが具体的な事例に即して展開していくための前提として、概念や研究視角に関する基本的な共通理解を得るべく、メンバー 4 名による報告が行われた。研究代表者の石田勇治が「歴史と和解」について本プロジェクトの基本理解に関わる報告を行った。川喜田敦子は概念史的アプローチで「和解」概念を分析する報告を行い、今後のアジアにおける「和解」概念との比較研究の土台を提供した。大下理世は、本プロジェクトの重要概念である「記憶と想起」および「パブリック・ヒストリー」という二つの概念（問題領域）について、歴史的成り立ち、理論的枠組みと含意、先行研究の整理と研究上の課題の提示を行った。平松英人は「記憶と和解」をめぐるローカルな諸問題に「都市空間」という分析視角を導入することで、本プロジェクトが最終的に目指す「グローバルな視座の獲得」にどう貢献するかという研究視角の提案を行った。4 本の報告を通じて本プロジェクトの重要概念について基本的な共通理解を得、議論の枠組が共有されたことで、「記憶と和解」にアプローチするための題材と視角を各自がより具体的に構想できるようになったといえる。

研究メンバーによる内部の研究会 2 回の成果を踏まえ、2021 年 3 月 12 日にはキャラバンとして訪問予定のパートナー校から研究者を招聘し、国際ワークショップを開催した。このワークショップは、本プロジェクトと深く関係するドイツ・ヨーロッパ研究センター（DESK）の研究プロジェクト「トランスナショナルな都市空間における和解研究」（代表：平松英人）との合同企画として開催したものである。レナート・クランツ氏（ドレスデン工科大学）「非連続性のなかの連続性－ドレスデンにおけるバロックと近代の間の想起の文化」、クリスティーネ・クリューガー教授（グライフスヴァルト大学）「コヴェントリー－ドレスデン 行動・償いの印と和解建造物の思想」、大下理世「西ドイツの「想起の文化」とブランド政権－ベルリンとラシュタットの歴史展示に着目して」、イレネウス・パーヴェル・カロレフスキ教授（ライプツィヒ大学）「想起のゲームとポスト共産主義における記憶の政治化」、という歴史学、政治学分野からの 4 報告（日独両言語）が行われ、ミヒャエル・ローアシュナイダー教授（ボン大学）の総括コメントののち、コーディネーターの平松英人、川喜田敦子、小川浩之、阿古智子も参加して質疑応答と議論が行われた。本ワークショップにはキャラバンプロジェクトで研究協力関係の深化が期待されるドイツ語圏の諸大学、とくにハレ大学のヘットリング教授らが参加しただけでなく、イギリス、ポーランド、イスラエル、韓国からも研究者の参加者があり、本プロジェクトの意義を世界に向けて発信することができた。

本年度は海外でのキャラバン活動ができないという制約の多い状況の下、密度の濃い 2 回の研究会と年度末の国際ワークショップを通して、当初の想定を超える成果を生み出したと考えている。来年度は、内部的な研究会を開催するほか、2021 年 11 月にドイツ・ヨーロッパ研究センターの DAAD 東アジアセンター会議の枠内で、本プロジェクトに関連するパネルを組む予定である。そのなかで、最終的な成果の刊行に向けて、個々の参加メンバーがそれぞれの研究を一層深めていきたい。